

# カント自由論における自我の二面性テーゼと 二世界解釈との融和

千葉清史

(山形大学人文学部)

カントの「超越論的観念論」における現象と物自体の区別をめぐる今日の解釈論争は、いわゆる「二世界解釈 two-world interpretation」「二側面解釈 two-aspect interpretation」のいずれに与するか、という仕方で展開されることが多い。現象と物自体の区別を、二世界解釈は、二つの異なる存在者の間の区別と捉え、二側面解釈は、同じ物についての二つの側面の区別と捉える。

どちらの陣営にも強みと弱みがあり、論争の決着は容易につけられるものではない。私自身は二世界解釈に与するが、本論考の目標は非常に限定的なものである。本論考において私は、二世界解釈にとって重大な困難を突きつける、カントの「自我の二面性テーゼ」を取り上げ、これが二世界解釈に対する決定的な反例になるわけではない、ということを示したいと思う。

私が「自我の二面性テーゼ」と呼ぶものは、カント自由論、とりわけ、『純粹理性批判』第三アンチノミーの解決（「純粹理性のアンチノミー」第9節，A532-558/B560-586）の鍵となる次のような主張である：行為主体である自我は、一方では現象であるが、他方では物自体である。この主張に基づき、第三アンチノミーにおいて問題になっている因果的決定論と自由の抗争は次のように調停されることになる：自我は現象としては因果的決定論に服するが、それが物自体である限りにおいて、超越論的自由を享受し得るのであり、こうして、決定論と自由は両立する。

カントのこの議論は、いずれにせよ多くの解釈上の問題を含む。それはしかしながら、まさにその鍵となる自我の二面性テーゼにより、二世界解釈にとって特別に深刻な困難を提起する。というのも、自我の二面性テーゼはまさに、少なくとも自我にとって、現象と物自体は、自我という同じものの二つのあり方の区別である、と述べるものだからだ<sup>1</sup>。少なくとも自由論に関しては、二側面解釈の側に圧倒的な利がある、ということ、を、二世界解釈者として認めざるを得まい。

---

\*カントの著作からの引用は慣例に従い、『純粹理性批判』に関しては第一版と第二版の頁数を、それ以外の著作については、タイトルを示したのち、アカデミー版の巻数とその頁数を示した。

<sup>1</sup> このことゆえに Wood 2005 (p.74) は、自我の二面性テーゼを二世界解釈にとっての「致命的な問題 fatal problem」として挙げている。

しかしながら、自我の二面性テーゼが二世界解釈の決定的な反例となるかどうかはまた別の問題である。本論考が目指すのは、二世界解釈の枠組みにおいて自我の二面性テーゼとそれに基づくカント自由論の諸議論を理解することは不可能ではなく、従って、カント自由論に関する二側面解釈の優位は、二世界解釈を退ける決定的な論駁とはならない、ということを示すことである。この問題設定により、本論考は、カント自由論に関して、二側面解釈においても生じるような問題を論じることはしない。カント自由論が、二世界解釈の枠組みでも、二側面解釈と同等程度には理解され得る、ということが示されれば、本論文の目的は果たされたことになる。

本論考は次の順に進行する。第一節では、二世界解釈と二側面解釈それぞれの立場を素描する。両者の区別に関して私はすでに別稿で論じたので、ここでは以下の議論で必要な限りについてのことのみを述べることにする。第二節では、自我の二面性テーゼならびにそれに基づく自由と決定論の両立性についてのカントの議論を紹介し、なぜそれがとりわけ二世界解釈にとって問題的呢かを明らかにする。第三節では、そうした問題を解決し、二世界解釈の枠組みにおいて自我の二面性テーゼを理解する仕方を提案する。最後に第四節で、予想される若干の批判に対して私の提案を擁護する。

### 第一節 二世界解釈／二側面解釈

先に導入的に述べたように、二世界解釈と二側面解釈を区別する定義的要件は、現象と物自体が二つの異なる存在者であるか、それとも同じ物の二つの側面であるか、ということである。これは単に、「現象 *Erscheinungen*」と「物自体 *Dinge an sich (selbst)*」という語をカントがどのように用いているか、という表面的な問題にとどまるわけではない。両者はそれぞれ、カントの超越論的観念論——我々の経験の対象は物自体ではなく現象である、という理説——についての、相対する二つの理解を代表するものである。

二側面解釈の方が理解しやすいので、まずはこちらから始めよう。二側面解釈によれば、我々が経験的に認識する物 *Ding* は、それが我々に現象してくる側面とは別に、それが、我々に認識されることから独立に、それ自体において持つ側面をも持つ。さて、我々が経験的に認識する物そのものが「自体的」側面を持つ、と考えられる以上、我々が経験的に認識する物は、それ自体においては我々の認識から独立に存在する、と想定されざるを得ない<sup>2</sup>。従って、二側面解釈は、我々の経験的認識とその対象について次のような主張を行うものとなる：

<sup>2</sup> これは、二側面解釈の中でもとりわけ「形而上学的二側面解釈」と呼ばれる立場の主張である。二側面解釈には「方法的」と呼ばれるヴァリエントもあるが、この立場は正確に理解されるならばほとんど魅力のないものであることを私はすでに千葉 2014 において示した。従って私は本論考でこのヴァリエントについて論じることはしない。

## カント自由論における自我の二面性テーゼと 二世界解釈との融和

実のところ我々は、我々の認識から全く独立に、それ自体で存在する諸物を認識している。もっとも、そうした諸物がそれ自体であるあり方ではなく、それらが我々に現象してくるあり方を認識するに過ぎないのではあるが<sup>3</sup>。

我々が経験的に認識する個々の物を考えてみよう。上の主張によれば、我々が相異なる物として経験的に認識する個物 a と b は、我々の認識から独立にも、それ自体において、相異なる物である<sup>3</sup>。すなわち、二側面解釈によれば、我々が経験的に認識する諸物は、我々の認識から独立に、いわば自己個体化を行っている、ということになる<sup>4</sup>。

二世界解釈ではどうなるだろうか。それによれば、現象とは、表象・志向的対象・感覚からの論理的構成物といった<sup>5</sup>、それそのものが我々の認識に依存してのみ存在するようなものであり、対して物自体は、我々の認識から独立に存在する物である。我々の認識に依存して存在する物は、当然のことながら（「認識依存性」の同じ意味において<sup>6</sup>）我々の認識から独立に存在することはできないから、現象と物自体は異なる存在者とみなされざるを得ない。二世界解釈では、我々の経験的認識とその対象については次のように主張されることになる：

我々が経験的に認識する物は、我々の認識に依存して存在するもののみであり、これがカントが「現象」と呼ぶところのものである。物自体、すなわち、我々の認識から独立に存在するものは我々にとっては認識不可能である。

さて、二世界解釈は、現象と物自体（あるいは現象界と叡智界）の対応を認めるか否かに応じて二つのヴァージョンに分かれる。ここで、現象と物自体の「対応」ということで何が理解されるべきなのかをまず明らかにしておこう。

---

<sup>3</sup> あるいはそれらは少なくとも、相異なる時空的個物として現象してくるような、それ自体において相異なる何物か——例えば、個々の実体ではないにせよ、相異なる性質や関係といったようなもの——である。このように表現した方がより適切であるような文脈は存在するが、この点は以下の考察にとって重要な論点とはならないので、以下では簡明さのために、本文における表現を用いる。

<sup>4</sup> これは、私が Chiba 2012 以降、「實在論的」と呼ぶ立場である。

<sup>5</sup> 現象を志向的対象と解釈する例としては Aquila 1983 を、感覚からの論理的構成物として解釈する例としては Bennett 1966, Van Cleve 1999 を参照。

<sup>6</sup> 当然のことながら、ある基準（例えば、可能的認識に依存するか否か）に関して「認識依存的」存在を持つ、とされる物が、別の基準（例えば、現実的認識に依存するか否か）に関しては「認識独立的」性質を持つ、ということならばあり得る。しかしながら、ここで限定なく「認識独立的／依存的」と言われているのはもちろん、同一基準に関してのことであり、その限りにおいて、認識依存的に存在するものが認識独立的に存在することはありえない、ということは自明である。

ジェイムズ・ヴァンクリーヴ（1999, p. 157）が適切にも述べるように、現象と物自体との間に何らかの対応／同型性が存する、という程度のことならばあまりに空虚である。というのも、この程度のことならば、同じ濃度（基数）を持つ任意の二つの集合に関して成り立つからである。現象と物自体の対応、と言われる場合に意味されているのはむしろ、彼が「説明に関する同型性 explanatory isomorphism」と呼ぶ次のようなことである：

「[時空的＝現象的關係] R が [時空的対象] a と b の間に成立する場合には常に、そうであるのは関係 R\* が a と b の [物自体の側での] 対応物の間に成り立っているからである。単にある種の同型性が存在しなければならない、というだけでなく、事物が実際にそうであるような現象的秩序において関係し合っているのだからなければならないのは、事物が実際にそうであるような叡智的秩序において関係し合っているからである。」  
(Ibid., p. 159)

この考えを用いれば、現象と物自体の対応を認める二世界解釈の立場は次のように表現できる：現象的個物 a と b そのものは我々の認識に依存してのみ存在するが、それらの基礎にはそれぞれ相異なる物自体が存し、そして前二者が相異なるのは、後二者が相異なるがゆえである。我々が経験的に認識する個々の時空的対象＝現象は、その基礎にあり我々の認識から独立に自己個体化を行っている物自体を——我々の感性的ならびに悟性的制約を通じて体系的に変容された仕方ではあれ——写像するものなのだ<sup>7</sup>。

この立場を理解するためには、鏡像のアナロジーを用いるのが有用だろう。物 p と q が鏡の前にある、と想定せよ。両者の鏡像 p<sub>m</sub>, q<sub>m</sub> はなるほど鏡に依存してのみ存在するものだが、これらが異なるものであるのは、鏡像がその像であるところの物 p, q が相異なる物であるからに他ならない。このアナロジーを用いれば、現象的個物の個体化は、それが物自体のレベルで存しているところの個体化の反映だということになる。現象的個物は、我々の認識から独立に、そのそれぞれの基礎にある物自体のレベルですでに個体化されており、「現象的個物 a と b が存在する」ということのうちには、それらそれぞれの基礎にある相異なる物自体が存在する、ということが含意されているのだ。

それに対し、現象と物自体の対応を積極的には認めない二世界解釈のヴァージョンは次のように主張する：現象界は叡智界の写像ではなく、我々が経験的認識を通じていわば「構成」するものである。現象的個物の個体化に関して言えば、それは、もっぱら我々の経験的認識の文脈において規定される限りのものである。

<sup>7</sup> このことゆえに、この立場は、註4の用語を用いれば「實在論的二世界解釈」とも呼ばれ得る。それに対し、後述の現象と物自体の対応を認めない二世界解釈は、「反實在論的二世界解釈」である。

## カント自由論における自我の二面性テーゼと 二世界解釈との融和

ここで、この立場を理解するために重要な二点を述べておこう。第一に、この立場は、我々の現象界の構成に際して、物自体はいかなる仕方でも関与しない、と主張するものではない。現象界の構成に際して我々人間の主観は完全に自由なわけではなく、物自体からの触発によって与えられる感性的質料＝感覚に拘束される。第二に、この立場においては、個々の現象的個体に関して、それらそれぞれの基礎にある物自体を想定することも許容される。というのも、個々の現象的対象の構成がそれぞれ基づく特定の感性的質料がある限り、その感性的質料を生み出す（という意味において当の現象的対象の基礎にある）物自体が存在する、ということは認められるべきだからである。

この点を認めるにもかかわらず、この立場は、現象と物自体の対応を認める先のヴァージョンからは次の点において依然として区別される。先のヴァージョンとは異なり、このヴァージョンにおいては、「現象的個体 a と b が存在する」ということのうちに、それらそれぞれの基礎にある相異なる物自体が存在する、ということも含意されない。a と b の基礎にある物自体は、ひょっとすると同じものなのかもしれないのだ<sup>8</sup>。こうして、現象界は叡智界の写像である、という考えが放棄され、現象的個体の個体化は、徹頭徹尾我々の経験的認識の文脈に内在的なものとされることになる。

さて、現象と物自体の対応を認める前者のヴァージョンにはいくつかの利点がある。その一つは、二側面解釈の証拠として典型的に持ち出されるカントの言い回し——《現象と物自体の区別は一つと同じ物についてのものだ》《現象とは物自体が我々に現象してきたところのものだ》という類いのもの<sup>9</sup>——を二世界解釈に融和させられる、ということである。先の鏡像のアナロジーを用いれば、私が鏡の前に立って自分の鏡像を見る場合、鏡像は確かに私とは異なる存在者ではあるが、私の像であり、（鏡に映されることから独立に存在する）私が（鏡を通して）現象してきたものでもある。それどころか、この事態を、「私は私自身を見ている」と表現することすら可能である。同様にして、前者のヴァージョンは、二側面解釈を支持するカントの言い回しと整合的なものとなる。

しかしながら、まさにこのことにより、前者のヴァージョンは、二側面解釈と実質的にはほとんど区別できないものとなる<sup>10</sup>。（両者の違いは高々、《鏡を覗き込むとき私は自分

<sup>8</sup> 相異なる現象的個体の基礎にあるのは相異なる物自体である、ということがたまたま事実である、という可能性をこのヴァージョンはあえて否定する必要はない。このヴァージョンにとって本質的なのは、《個々の現象の存在はそれに対応する個々の物自体の存在を含意し、——従って、異なる現象的個体が存在する限りそれらの基礎にある異なる物自体がなければならず——こうした意味において、現象界は物自体の写像である》という考えを拒否する、ということである。

<sup>9</sup> 前者については例えば BXXVI, BXXVIII, B56, B69, B306:1787年8月7日ガルヴェ宛て書簡, AA10, p. 341註を、後者については例えば BXXVII, A38/B55, B69, A249を参照。

<sup>10</sup> Oberst 2015 がそうした見解に魅力を感じるのはまさにこれゆえのことである。その際彼は、もっぱらカントの言い回しに整合的な解釈を与えることにしか留意していない。



を見ているのか、それとも鏡像を見ているのか》といった単なる言い回しの問題に類するものとなる。）その結果、それは、二側面解釈の難点をほぼそのまま引き継ぐ。ここで詳述することはできないが、二側面解釈の最大の難点は、我々の経験的認識の対象が我々の認識から独立に個体化されている、という想定のうち存する<sup>11</sup>。二世界解釈の前者のバージョンは、少なくとも同じ想定を共有し、それゆえ、二世界解釈が二側面解釈に対して持つ重要な利点を放棄することになる。

この理由から、私は以降で後者のバージョンを主に扱い、限定なしに「二世界解釈」と述べる場合にはこのバージョンを指すことにする。

## 第二節 自己の二面性テーゼとその二世界解釈に対する問題

先述の通り、自己の二面性テーゼとは、《行為主体である自我は、一方では現象であるが、他方では物自体である》というものである。カント自身の表現は例えば次のものである：

「人間自身は一方では現象体 Phänomen であることはもちろんだが、他方では、すなわちある種の能力に関しては、単に叡智的 intelligibel な対象 [すなわち物自体] である、…。」(A546/B574)<sup>12</sup>

このテーゼは、第三アンチノミーの解決、すなわち、人間における因果決定論と自由の両立可能性を打ち立てる鍵となる。カントの解決は次のようになる：

「そしてその場合、我々は、感性界の主体に際しては、第一に経験的性格を持つであろう。これによって主体の行為は、現象として、徹頭徹尾、他の現象と、恒常的自然法則に従って連関せしめられ […] ることとなろう。第二に、感性界の主体にはさらに叡智的性格が認められなければならないだろう。これによって主体は、現象としての自らの行為の原因ではあるが、その性格自身は感性の制約に従属せず、それ自身現象ではない。第一の性格はそうした物 [すなわち「感性界の主体」] の現象における性格と名づけられ、第二の性格は物自体の性格と名づけられ得るだろう。」(A539/B567)

<sup>11</sup> Chiba 2012 の第二部を参照。

<sup>12</sup> このテーゼが論じられる中心的なテキスト箇所は、A538-41/B566-9（「自然必然性の普遍的法則との統合における、自由による因果性の可能性」の節）全体であり、次の引用もこの箇所からのものである。他には次の箇所も参照：BXXVIII.；『プロレゴメナ』, AA4, p. 344.；『道徳形而上学の基礎付け』, AA4, p. 451, p. 453；『実践理性批判』, AA5, p. 95, pp. 97f.

## カント自由論における自我の二面性テーゼと 二世界解釈との融和

この解決を要約すれば次のようになる：自我は、現象としては決定論的な自然法則に従属するが、物自体としてはそうではない、ということがあり得る。

さて、自我の二面性テーゼは、二側面解釈と非常に折り合いがよい。二側面解釈は、現象と物自体は同じ物の二つの側面である、と主張するものであった。自我の二側面テーゼは、これを我々人間（＝行為主体）に当てはめたものである。そしてこのことは、上に引用した二つの箇所<sup>13</sup>にたまたま当てはまるようなことではない。第三アンチノミーの解決を素直に読むならば、そこでカントは一貫して二側面説の枠内で語っていることは明らかである。その限りにおいて、自己の二面性テーゼは二世界解釈の明瞭なテクスト的反例である、ということは、二世界解釈の支持者とて否定することはできない。

しかしながら、この反例をもって二世界解釈全般の破綻を結論するのは早計である。今まで言われたことは、第三アンチノミーの解決におけるカントの言い回しが、二側面解釈を強く支持する、ということに過ぎない。言い回しはもちろん解釈における一つの重要なファクターではあるが、より重要なのは、カントがそこで展開している議論の実質である。そして——紙面の関係でここで詳述することはできないが——二世界解釈を支持し、二側面解釈を窮地に追い込むような実質的かつ強力な論点が他に存在する<sup>13</sup>。この点に鑑みれば、第三アンチノミーの解決におけるカントの議論が二世界解釈の枠組みでも理解可能であることさえ示せれば、上述の問題に対して二世界解釈を擁護することが可能となる。

次節で私はこの課題に取り組むが、本節ではまず、この課題が直面する問題を明瞭化することを試みよう。

自我の二面性テーゼを二世界解釈の枠組みで理解しようとするならば、現象としての自我と物自体としての自我——この表現そのものが二側面解釈を避けがたく含意してしまうので、以下、「経験的自己」「叡智的自己」と言い換えることにする——を二つの異なる存在者と見なすことが不可欠となる。このことから即座に困難な問題が生じる：二つの異なる存在者がそれにもかかわらず一つの同じ自己である、という一見すると自己矛盾する事態は、いかにしてそもそも理解可能なものとされ得るのか？——この問題を解決すべく、私はまず次の説明図式を提案する：

自我はそれ自体においては叡智的自己である。それに対し、経験的自己は、自我自体からは数的に区別される、その「現象」である。

さて、この説明図式を、人物／鏡像のモデルを用いて理解しようとすることはきわめて自

<sup>13</sup> Chiba 2012 の第二部を参照。

然なことである。それによれば、鏡の前にいる人とその鏡像が二つの異なる存在者であるのと同様に、叡智的自己と経験的自己は異なる存在者である、ということになる。しかし、このモデルはさらなる問題を生み出す：

(1) 第三アンチノミーにおけるカントの問題設定からすれば、《私は空間・時間のうちに存在する》《私は他の時空的対象と因果的に連関する》といったことは、少なくとも現象としての自我に関しては真であるのでなければならない。しかしながらそのようなことは上の説明図式ではそもそも許容されないように思われる。というのも、上の説明図式では、経験的自己を自我と同一視することは全くできなくなるように思われるからである。次の例を考えよ：鏡像は私の像であるかもしれないが、私自身ではない。「私は鏡の中にいる」といった発言が、比喩以上の意味で真となる、などと考える者はいないだろう。

(2) この問題が何らかの仕方で解消されたとしても、本論考が主に扱う、現象と物自体の対応を認めない二世界解釈のヴァージョンにとっては、さらなる問題が生じる。上の説明図式によれば、叡智的自己こそが自我そのものであり、経験的自己はその現象とみなされることになる。しかしながら、こうしたことを認めるならば、経験的自己を叡智的自己の一種の写像とみなし、《経験的自己は、叡智的自己の個体化に対応する仕方で個体化されている》と結論せざるを得なくなるように思われる（鏡像は本体の像として、後者に対応するように）。そしてこのようなことがひとたび人間の主観に関して認められるならば、同様のことを時空的対象一般へと拡張することを阻む理由はないことになるだろう。というのも、人間を例外視することは、存在論的な観点からはきわめて疑わしいことだからだ<sup>14</sup>。

これに対し私は次のように論じたい：これらの問題は、上述の説明図式そのものの問題というよりは、それを理解するために提示された鏡像モデルから生じる問題に過ぎない。次節で私は、上の説明図式を（対応の想定なしの）二世界解釈の枠組みで展開するための代替モデルを提示することを試みよう。

### 第三節 諸問題の解決

代替モデルが満たすべき条件は次のようなものである：(1) 上述の説明図式に基づきつつも、自我自身とは数的に異なる存在者である経験的自己を自我と同一視することが可能であること。(2) 経験的自己が、自我自身であるところの叡智的自己に対応する、という結論を避け得るものであること。

この条件を満たすものとして、私は鏡像モデルに替わるアバターモデルを提案する。「ア

<sup>14</sup> Adams 1997 と Hanna 2001 は、人間の行為主体のみに例外的に二側面解釈を適用する解釈を提案したが、このような例外視がカント哲学体系の整合性を損なうものである、という点を十分に酌量していないように思われる。



カント自由論における自我の二面性テーゼと  
二世界解釈との融和

「アバター」とは、今日のオンラインゲーム（例えば、2008年頃に話題となった“Second Life”のようなものを想起されたい）における概念であり、オンラインゲームの仮想世界においてプレイヤーを代表するキャラクターのことである。プレイヤーはアバターの視点を通じて仮想世界を体験し、さらにはそれを通じて仮想世界の出来事に一定の影響を及ぼしたり、他のプレイヤーとコミュニケーションをとることもできる。その限りにおいてアバターは、一種の疑似-行為主体と見なされ得る。

さて、アバターは、目下の文脈に関連するものとして、次のような特性を持つ：

- (a) アバターは、プレイヤーと数的に異なる存在者であり、しかも、プレイヤーとは異なり、オンラインゲームのシステムによって描写される限りにおいて存在する、という点において存在論的にも異なっている。
- (b) にもかかわらず、少なくともオンラインゲームの仮想世界においては、プレイヤーが自分自身をそれと同一視することが無理のない仕方では理解され得る。—— 例えばゲーム中での、他のプレイヤーとの次のような会話を考えよ：「君は今どこにいるんだい？」「私なら洞窟の入り口のところにいるよ。」（もちろんプレイヤー自身は実際にはパソコンの前にいる。）

この「アバター」とのアナロジーによって、自我の二面性は次のように読み替えられる：

- (a') 経験的自己は、自我自体であるところの叡智的自己と数的に異なる存在者であり、しかも、叡智的自己とは異なり、我々によって認識される、ということに依存する、という点において存在論的にも異なっている。
- (b') にもかかわらず、自我が経験的自己を自分自身と同一視することに理解可能な意味が与えられ得る。

このような理解を可能にすることにより、アバターモデルはまず、本節冒頭で提示された条件（1）を満たす。

このモデルが条件（2）をも満たすことを見るためには、自我の二面性の場合とプレイヤー／アバターの場合との間の重要な相違に注目することが必要となる。後者において、プレイヤーはもちろん仮想世界における自己のアイデンティティーとは別に、現実世界の個人としても同定され得る<sup>15</sup>。このことはまさに自我の場合には当てはまらない。物自体の不可

<sup>15</sup> まさにそれゆえに、コンピューターゲームの場合には、「アバターはプレイヤー自身である」と言うよりは「プレイヤーはアバターを操作する」と言う方が尤もらしくなる。

知性により、叡智的自己は、他の物自体と並び立つ叡智的存在者として直接に同定されるわけではない。アバターの比喩を拡張して言えば、我々人間はいわば、ゲーム上の仮想世界しか認識し得ず、自己の具体的なアイデンティティーとしてはアバターとしてのそれしか持たないプレイヤーのようなものなのだ<sup>16</sup>。そのようなプレイヤーももちろん、オンラインゲームのシステムから独立に存在する自己自身＝叡智的自己について語ることはできる。しかしながら、それは高々、まずは自分自身を他の時空的对象と並び立つ現象的個体として同定した上で、それに基づいて、「その基礎にある物自体」という仕方で叡智的自己を想定することによってのことにすぎない。しかしながらこうした想定において、《自らの経験的自己の基礎にある物自体が、他の行為主体として経験的に同定される諸人物の基礎にある物自体とは異なるものである》といったことは全く含まれない。自己の個体化に際して用いられるのは経験的に適用可能な基準のみであり、それは高々我々自身の経験的自己をそれ以外の時空的对象から区別する役に立つに過ぎない。

我々は自らの経験的自己を同定する基準しか持ち合わせていないのだから、それに甘んじざるを得ない、というのは十分に適切な言い方ではない。叡智的自己を直接に同定する手段など我々にはそもそも必要ないのである。我々は実際に、まずは自分自身を他の時空的对象に並び立つ時空的存在者として同定し、それに基づいて自己を理解している。その基礎にある叡智的自己を他の物自体に並び立つものとして同定する、などということは、仮にそのようなことが可能であるとしても、こと自分の具体的なアイデンティティーの理解に関しては、全く余計なことに過ぎないのだ。

注意してほしい。自我自身は叡智的自己として、他の物自体から区別されている（＝自己個体化を行っている）が、それについて我々は、現象として個体化された経験的自己の基礎にあるもの、という仕方でしか認識できない、と私は言っているのではない。上で述べられたことのポイントはむしろ次のことである：自我が他の物から区別される存在者である、ということの意味のうちにあるのは、自我が現象として他の時空的对象から区別される、ということだけなのだ<sup>17</sup>。

この点が顧慮されるならば、アバターモデルは同時に本節冒頭に提示された条件（2）を

<sup>16</sup> 映画“Matrix”におけるように、自己自身が何ものかに意図的に隠蔽されているわけではない。（この場合、こうした隠蔽を除去すれば我々は自己自身を知り得ることになる。）物自体の不可知性は人間にとって本質的なものであるので、我々が人間である以上、叡智的自己を認識することは本性上あり得ない。

<sup>17</sup> 「その基礎にあるもの」として物自体が想定されるにしても、そのように想定されたものの個体化は経験的自己の個体化に寄生的なものに他ならない。従って、そのような物自体が、他の経験的自己の基礎にある物自体と相異なる個体でもあるかどうか、ということは全く決定されないし、そのようなことはそもそも、我々自身が互いに区別される仕方についての我々の自己理解にとってはどうでもよいことである。

## カント自由論における自我の二面性テーゼと 二世界解釈との融和

も満たすものであることがわかる。個々の経験的自己が存在する、ということの意味のうちには、そのそれぞれの基礎にある叡智的自己が相異なる物自体である、ということは含まれない。我々自身の個体化は、経験的認識の文脈においてすでに十分になされている。それらの基礎にある叡智的自己を想定することは、経験的に確定された自己の基礎にある「何ものか」を考える、という（おそらくは形而上学においてのみその場所を持つ）付加的な思考に過ぎない。そうした「何ものか」が他の物自体、とりわけ他人の基礎にある物自体から区別される保証はどこにもないし、そもそもそうしたことは、我々自身の具体的な自己理解に関してはいかなる役割をも果たさない。経験的自己を認識することにおいて、我々は、叡智的自己を写像しているわけではないのだ。

今までに述べられた事態はカントの実践哲学によって変更を受けることもない。確かに『実践理性批判』においては、自由の現実性が「理性の事実」によって証される（cf. AA5, p. 47）。しかしながら、カントのそこでの議論を通じて証明されることはせいぜい、経験的自己の基礎にある叡智的な何ものかが自由意志を持つ、ということに過ぎず、例えば二人の経験的自己のそれぞれの基礎にある叡智的存在者が二つの異なる物自体である、ということではない。すなわち、実践哲学的考察が行為主観の同定のための、理論哲学の枠内では可能でなかったような、新たな基準を与えるわけではないのだ。—— こうした結論にはカントも同意したことだろう。というのも、彼によれば、実践哲学的考察ですら、物自体のあり方を我々に認識せしめるわけではないからだ。

以上で仕上げられた説明図式により、自我の二面性テーゼによる決定論と自由の両立可能性についてのカントの議論は次のように理解されることになる：自我の二面性テーゼにおいて自我の二面として語られるものは、数的に異なる経験的自己と叡智的自己である。自我は、自らを他の時空的対象と決定論的自然法則によって連関する経験的自己として同定することによって、自己を個体化する。自我自体であるところの叡智的自己はしかしながら自然法則に服せず、よって自由意志を享受し得る。叡智的自己は経験的自己の基礎にあるが、しかしながら、上で説明されたように、このことによって現象と物自体の対応が想定されるわけではない。—— このように改訂された議論は本質的には自我に関する二世界説ではあるが、カントの自由論における諸議論とうまく斉合する。

### 第四節 批判に対する応答

最後に、想定される三つの批判に応答することによって、前節における私の提案の意図と内実を明瞭化することを試みよう。

批判（1）：カントが彼の自由論においてアバターモデルのようなことを意図していた、と考えることには無理がある。

こうした疑念は、上の解決を見てまずはじめに思いつくものであろう。それは、単にカントの時代にはオンラインゲームが存在しなかった、というだけの問題ではない。より重要なのは、第三アンチノミーの解決において、カントは一貫して二側面的な言い回しを用いている、ということであり、上の解決はこれに反するよう見えるのである。

さて、この批判に対しては次のように応答できる。第三アンチノミーの解決においてカントは実際に二側面説の枠組みで考えており、従ってカント自由論は実際に二世界解釈の反例となっている、ということを私は認める。とはいえ、『純粹理性批判』には、カントが二世界説の枠組みで考えていたと解されざるを得ないような箇所も存在する。二側面説か二世界説か、ということに関しては、カント自身が一貫していないのだ。そこで問題は、二側面説と二世界説のうちのどちらが、単なる言い直しだけではない、カントの実質的議論を首尾一貫したものとして理解させることを可能とするのか、ということである。そして、私が示したのは、最大の難点と考えられる自我の二側面テーゼですら、二世界説の枠組みに収まるように読み替えることができる、ということである。このことが示されれば、少なくとも私の本論考における意図は満たされることになる。

批判（2）：前節の解決は、自我が経験的自己と叡智的自己を持つ、という考えを放棄していない。その限りにおいて、経験的自己と叡智的自己は自我の二つの側面である、と表現してもよいように思われる。しかしそうだとすると、前節の解決は、結局のところは二側面解釈の一種である、ということにならないだろうか？

こうした批判は、二世界／二側面解釈の対立を、現象と物自体の区別に関する単に言い直しだけの問題として理解することに基づいている。ここで再び、二世界／二側面解釈の間にあるより基本的な存在論上の対立が想起されるべきである。

二側面解釈の基礎にあるのは、我々が経験的に認識する物は認識から独立に存在し、従って、我々の認識から独立に自己個体化を行っている、という存在論的想定である<sup>18</sup>。前節における私の議論が正しければ、この想定は前節の提案においては実際に否定される。従って、前節の解決は、少なくとも標準的に理解された二側面解釈に対する代案となっている。

（3）アバターモデルでは、自我は、自らの経験的自己をいわば操作する、ということになろう。さて、現在のゲーム環境では、例えばゲーム上の仮想世界においてアバターが殴られても、プレイヤーが痛みを感じることはない。しかし、これに関しては、仮想現実においてアバターに与えられた刺激をプレイヤーが体感することができるシステムが将来構築され

<sup>18</sup> 二側面解釈の代表者のほとんどは、明示的にこうした見解にコミットしている（代表的なものとして、Ameriks 1992, Allison 2004, Allais 2007, Rosefeldt 2007 を参照）。二側面解釈の代表者としてしばしば挙げられる Prauss 1974 の場合は少し違うが、彼の解釈の具体的内実を検討すれば、それを二側面解釈と呼ぶことは適切ではないことが分かる。Chiba 2012, pp. 83f. を参照。

## カント自由論における自我の二面性テーゼと 二世界解釈との融和

るかもしれない。自我はむしろこうしたシステムと類比的なものであり、叡智的自己は、単に経験的自己を操作するだけではなく、経験的自己からの入力をも受け入れるような仕方ですれと結合している、と考えられるのが適切であるように思われる。

とはいえ、こうした想定は、特にカント哲学の枠組みにおいては看過できない問題を提起する。我々は感情や欲求（飢えや渇き、名誉欲等々）を考慮しつつ、時にはそれに盲目的に突き動かされつつ、行為する。その際、普通に考えれば、感情や欲求を持つのは我々自身である。しかしながらカント哲学の枠組みにおいては、感情や感性的欲求が帰属するのは物自体としての自我ではなく、現象としての自我である。この考えを前節における私の提案に適用すれば、次のように結論されることになろう：感情や感性的欲求を持つのは、自我自体であるところの叡智的自己ではなく、それが操作する経験的自己である<sup>19</sup>。しかし、こうした結論は奇妙なものではないだろうか？ 感情をもち、しばしば欲求に突き動かされるのは、我々が操作する何ものかではなく、自分自身なのではないか？ 上のような結論に陥ってしまうとすれば、それは、前節における解決案が人間的行為主体の適切な説明ではない、というこの表れに他ならないのではないか？

この批判に対して私はよい解答を持ってはいない。とはいえ、本論考の目標に鑑みれば、次のことを指摘すれば十分である：同じ問題は二側面解釈においても生じ、よって、二世界／二側面解釈を決する問題というよりはむしろ、カントの人間観そのものに潜む問題である。この点に関して手短かに述べることにしよう。

感情や欲求を持つのは叡智的自我ではなく、従って自我自体ではない、という帰結は二世界説ではことさらに明瞭になる。とはいえ、同種の問題は二側面解釈を採っても生じる。というのも、二側面解釈の枠組みにおいても、感情や欲求が帰属するのは自我それ自体ではなく、その現象としてのあり方にすぎない、ということになるからだ。意志決定を究極のところで行うのは自我それ自体であるから、意志決定を行う我々自身が、まさにその意志決定の場面において感情や欲求に突き動かされる、という事態は、二側面解釈の枠組みのもとでも結局のところは否定されざるを得ないように思われる。—— こうした帰結を避ける仕方ですれ自我の二側面説を改良することはできるかもしれないが、その場合、適切な変更を加えれば、およそ同じ方策が前節で提示された私の提案にも適用できるであろうことは十分に期待できる。私は、この問題に対する二側面解釈の側からの解決をまず待つことにしたい。

<sup>19</sup> この場合でも、感情や欲求が現象界における我々の行為に何の影響も及ぼさない、ということになるわけではない。叡智的自己が意図することが、経験的自己の側での事情によってうまく実現しなかったりする、ということはあるようなことである（感情や欲求に突き動かされる場合などはまさにそうであろう）。しかしその場合、経験的自己と叡智的自己との関係は、現状のゲーム環境においてのように、例えば経験的自己が被る痛みを叡智的自己は自ら感じることなく、せいぜいが経験的自己を操作する際に考慮すべき情報の一つとして捉える、ということになるだろう。



以上の考察によって、前節において提示された私の提案は、本論考が意図する限りの正当化を得た。繰り返すが、私は、前節に提示された解釈提案が、二世界解釈の積極的な裏付けを提示するものである、とも、また、こと第三アンチノミーの解決についての解釈として、二側面解釈によるものよりも優れている、とも主張するつもりはない。今までの考察において試みられたのは、二世界解釈をその最大のテクスト的反例と思われるものから救い出すことである。そして今や、少なくとも次のように主張してよからう：二世界解釈は、カント自由論を引き合いに出す程度のことによって容易に棄却されるような柔弱な解釈オプションではない<sup>20</sup>。

### 参考文献

- Allison, Henry 2004: *Kant's Transcendental Idealism*, Second and Enlarged Edition, Yale University Press.
- Allais, Lucy 2007: "Kant's Idealisms and the Secondary Quality Analogy", *Journal of the History of Philosophy* 45, 459-84.
- Ameriks, Karl 1992: "Kantian Idealism Today", *History of Philosophy Quarterly* 9, 328-42.
- Aquila, Richard 1983: *Representational Mind*, Indiana University Press.
- Bennett, Jonathan 1966: *Kant's Analytic*, Cambridge University Press.
- Chiba, Kiyoshi 2012: *Kants Ontologie der raumzeitlichen Wirklichkeit: Versuch einer anti-realistischen Interpretation der Kritik der reinen Vernunft*, Walter de Gruyter.
- 千葉 清史 2014 : 「二世界解釈と二側面解釈：そもそも何が問題だったのか？」, 西洋近世哲学史懇話会（編）, 『近世哲学研究』第18号, 1-35頁.
- Hanna, Robert 2001: *Kant and the Foundations of Analytic Philosophy*, Oxford University Press.
- Prauss, Gerold 1974: *Kant und das Problem der Dinge an sich*, Bouvier Verlag.
- Oberst, Michael 2015: "Two World and Two Aspects: on Kant's Distinction between Things in Themselves and Appearances", *Kantian Review* 20, 53-75.
- Rosefeldt, Tobias 2007: "Dinge an sich und sekundäre Qualitäten", Stolzenberg, Jürgen (ed.): *Kant in der Gegenwart*, Walter de Gruyter, 167-209.
- Van Cleve, James 1999: *Problems from Kant*, Oxford University Press.
- Wood, Allen 2005: *Kant*, Blackwell.

---

<sup>20</sup> 本論文は、Chiba 2012 の第6.4節ならびに第8.4.3節に修正・加筆を加えたものである。また、本論文執筆に際しては、MEXT 科研費 26370004 の助成を受けた。



# Vereinbarkeit der Zwei-Welten-Interpretation mit der These der Zweiseitigkeit des Ichs in Kants Freiheitslehre

Kiyoshi Chiba

Die sogenannte „Zwei-Welten-“ und die „Zwei-Aspekte-Interpretation“ machen den Hauptgegensatz in der heutigen interpretatorischen Debatte über Kants transzendentalen Idealismus aus. Jede hat ihre eigenen Vorteile und Nachteile, daher kann die Debatte nicht einfach entschieden werden.

Im vorliegenden Aufsatz behandle ich Kants These der Zweiseitigkeit des Ichs, die der Zwei-Welten-Interpretation eine fatale Schwierigkeit zu bereiten scheint. Ich versuche, die Zwei-Welten-Interpretation gegen diesen scheinbaren Gegenbeleg zu verteidigen.

Was ich „Kants These der Zweiseitigkeit des Ichs“ nenne, ist folgende These, die in Kants Freiheitslehre, insbesondere in der Auflösung der dritten Antinomie, zentral ist: Das Ich, das ein Handlungssubjekt ist, ist einerseits eine Erscheinung, aber andererseits ein Ding an sich. Es ist offensichtlich, dass diese These die Zwei-Aspekte-Interpretation unterstützt, denn sie besagt, dass zumindest im Fall des Ichs die Erscheinung und das Ding an sich zwei Seiten ein und desselben Ichs sind. Selbst Verteidiger der Zwei-Welten-Interpretation könnten diese Tatsache nicht verleugnen.

Es ist aber eine andere Frage, ob die These der Zweiseitigkeit des Ichs ein *entscheidender* Gegenbeleg zur Zwei-Welten-Interpretation ist. In diesem Aufsatz versuche ich zu zeigen, dass es nicht unmöglich ist, die betreffende These im Rahmen der Zwei-Welten-Interpretation verständlich zu machen, sodass sie noch nicht zum entscheidenden Gegenbeleg zur Zwei-Welten-Interpretation dient.

Dieser Aufsatz ist wie folgt strukturiert: In Abschnitt 1 skizziere ich die Positionen der Zwei-Welten- und der Zwei-Aspekte-Interpretation. In Abschnitt 2 stelle ich die These der Zweiseitigkeit des Ichs und Kants Argument aufgrund derer für die Kompatibilität der Freiheit mit dem Determinismus dar und verdeutliche, warum die These besonders für die Zwei-Welten-Interpretation problematisch ist. In Abschnitt 3 gebe ich einen interpretatorischen Vorschlag, die These der Zweiseitigkeit des Ichs im Rahmen der Zwei-Welten-Interpretation verständlich zu machen. Im letzten Abschnitt verteidige ich meinen Vorschlag gegen drei denkbare Einwände.